

メーヨーイズム小論

— 疎外論 ノー ト —

三 戸 公

は し が き

メーヨーの事績ないしメーヨーの思想については、すでに論じつくされているといつてよいかもされない。ヒューマン・リレーションズが学問としても、経営技術としてもすでに制度的存在としての地位をしめるにいたっている今日、メーヨーがその始祖的地位をしめ、現在なお影響力をもっていることを考えれば、至極当然のことである。

いまさら、何をつけ加えるものがあらう。小論はただ、メーヨーの思想を彼の三部作『The Human Problems of an Industrial Civilization 1933 (村本栄一訳『産業文明における人間問題』日本能率協会)』『The Social Problems of an Industrial Civilization 1945 (藤田敬三、名和統一訳『アメリカ文明と労働』大阪商科大学経済研究会)』および『The Political Problems of an Industrial Civilization 1947』のうまゝ、とくに『The Social Problems』を中心として、これを疎外論としてとらえ、若干の検討を加えてみたものにすぎない。そのとき、マルクスの疎外論、そしてま

たドラッカーの疎外論について当然、閑読することにならざるをえない。だが、どれほどつつこむことができたであらうか、疑わしい。「疎外論ノート」と副題を付した所以である。

かつて、メーヨーを読んだとき、わたくしの疎外論は、「経営における人格化原理と機械化原理——藻利重隆教授『労務管理論』の吟味——」というかたちで雑誌P R昭和三十年十一月号に発表した(拙著『個別資本論序説』森山書店に所収)が、そのとき、数多き藻利批判に屋上屋を架するを憂えたが、この度の「メーヨーイズム小論」についても、内外枚挙にいとまなきメーヨー研究のことゆえ、いたずらに屋上屋を架するのそしりをまぬがれまい。ただ、現在のわたくしの疎外論についての単なる心覚えにすぎない。

(1) メーヨーに関する文献をいちいちあげるとはやめよう。ただ、学生諸君のために、桜井信行著『人間関係と経営者——エルトン・メーヨーを中心として——』経林書房をあげるとともに、疎外論的観点からメーヨーをとりあげたものとして、すでに、副田満輝教授の「ヒューマン・リレーションズ——一つの経済学批判としてのメーヨーイズム——」(九州大学、『経済学研究』第二十三巻第一号、所収)というすぐれた論文があることを記しておくにとどめる。

一 メーヨーイズム

およそ思想家なるものは、人間ないし社会の不幸をみつめ、それを独自にとらえ、その独自の把握にもとづいて解決の方法を提唱する。エルトン・メーヨー(Elton Mayo 1880—1949)は、いわゆる「ヒューマン・リレーションズ」の始祖の地位をしめる思想家であるが、もちろん、彼もその例外ではない。

彼は、現代産業社会において、社会解体の二つの徴候を発見し、これをもつめる。

その第一は、不幸な個人の数の増大である。諸個人は、直接的・現実的な社会的義務をもたず、自分自身にそむか

せられ、不幸な妄想的な個人的先入観の犠牲となりつゝある。人間はこの世で何より自分自身を愛しながら、しかも惨めになりゆきつゝある。

現代産業社会解体の第二の徴候は、現代産業社会における人間諸集団の組織が原始的な社会におけるそれと比べて低い水準にある、ということに関連するものである。形成せられた諸集団は他の集団と心から協同しようとする熱意をまったくもっていないということこそ、不幸にも、産業社会の特徴的な性格である。逆に、彼等の態度は一般的に警戒的であり、敵対的である。この道程によって、社会は鬱血状態におちいり、大惨害の前ぶれをつげる諸々の強力な圧力集団、権力集団間の混乱闘争を惹き起すのである。

では、なぜこのような不幸な現象が現代産業社会にあらわれたのであろうか。それは、およそどのような社会であらうとその社会が健康に維持存続せられるためには、満たされなければならない要件が、この社会においてみだされていないからである。あらゆる社会集団にとって、それがどのような文化水準にあらうと、二つの永続的に生起する管理的ないし行政的問題 *Problems of administration* に直面し、これをはっきりと把握し、解決しなければならぬ。すなわち、社会成員としての個人ならびに集団のために、次の二つのことを確保しなければならないのである。

第一に、物質的経済的必要の充足。

第二に、組織を通じての自発的協同関係の維持。

この物質的経済的必要の充足のために、自然における事物を人間の物的生活に役立つように取扱う能力としてあらわれる技術的技能 *technical skills* が成立し発達するが、他方において組織を通じての自発的協同関係の維持のために、他の人達からコミュニケーションをうけとり、共同の仕事に気の合った仲間としてやってゆけるように他人の態

度や考え方に対応しうる能力としてあらわれる社会的技能 *social skills* が生ずるのである。

技術的技能が停滞的な状態にあるならば、作業様式ないし生産をめぐる人間の結合様式もそれに対応して一定し、不変的であるとともに、それに相応じた社会的技能を生じ、社会は安定をつつけるであらう。そのような社会は、いちおう、「既成的社会」*established society* と呼ぶことができるであらう。約一世紀以前までの社会は、そのような既成的社会であった。技術的技能は停滞的であり、発達したとしても、まことにゆるやかなものであった。子供は、最初徒弟として生産物をつくったり、売ったりする技術的技能を身につけると同時に、その期間に技術的技能と不可分のかたちにおいて作業集団の成員の態度や考えの意味するところを知りそれに対応するすべ、すなわち社会的技能を身につけたのであった。

ところが、現在、われわれは有効なコミュニケーションと協同が既成の日常的過程によって自ら確保されていたような人間の集団関係Ⅱ組織の段階を、はるかに経過してしまった。物理・化学等の科学的進歩にうらづけられた技術的技能の発達は、たえざる発達過程にあり、その速度はますます増大しつつある。変化こそが常態というべきである。技術的技能の変化は、必然的に作業集団・生産をめぐる人間の結合の様式に変化をひき起さざるをえないのである。人間の集団ないし組織において変化が生ずれば、同時に社会的技能においても変化・発達が要請されざるをえない。すなわち、技術的技能が変化し発展しつつあれば、社会的技能もそれに対応し適応して変化し発展しなければならぬ。現代は、そのような社会、すなわち「適応的社会」*adaptive society* である。

では、現在、技術的技能の発達に応じて、それと適応的な水準にある社会的技能の発達をみているであらうか。現代教育制度・学校制度において、技術的技能の発達ならびにそれに関する科学的基礎に資するに、過度といえるほど

すすんでいる。だが、他方、それと均衡をたもつだけの社会的技能の研究と訓練との発達には、完全に失敗している。それは、まったく等閑に付されているのである。大学において、技術的技能に関する科学と技能は制度的に研究され教育されているのに、社会的技能の教育はいまだ制度化されたものではなく、したがって、そのための研究も教育も、もちろんそのための経験も欠けている。

現代社会はまさに適応的の社会であり、産業機構のどの部分をとってみても、個人間の人間の結合関係は不断に変化しており、われわれは技術的過程の変化に応じて、不断の人的結合の変化の中に生きている。それなのに、諸個人はだれも集団生活ならびに自発的な協同能力たる社会的技能を身につけていない。とすれば、諸個人はわれとわが属する集団から引きさかれ、われとわが身を不幸と感じ、さらにはそのような諸個人よりなるそれぞれの集団が協同的な関係を築きあげるのに失敗し、対立的敵対的な状態におちこむのは当然といふべきであらう。

では、以上のようにみてくるならば、現代産業社会における人間の不幸を脱却する唯一の道は、技術的技能の発達に対応する社会的技能を発達せしめる以外にない、ということがわかるであらう。しかれば、社会的技能は、どのようによれば発達させることができるであらうか。そのためには、まず、技能の何たるかを知らなければならぬ。

およそ、技能なるものは、事物や人間およびその複合物の取扱いにおいて経験によって獲得せられた実践的熟達・器用として特定点においてははっきり示しうるものである、という点で一般的知識とは異なる。知識は、ウィリアム・ジェイムズ (William James) によって分類されたように、具体的知識と抽象的知識の二つにわちらう。具体的知識は事実および状況についての直接的経験から得られたものであり、これにたいして抽象的知識は反省的抽象的思惟

の産物である。前者が模倣や試行錯誤による以外になかなか他人に伝達し難いのをたいして、後者は明確なかたちを与えることが可能であり、容易に伝達することができただけでなく、蓄積し保存することもできる。そして、技能は直接的知識の基礎の上にえられたものであり、科学は既存の技能を実験と論理によって体系化したものである。われわれは誰でも、物理学・化学・医学等の成果ゆたかな諸科学がこのような筋道をつねにふまえながら、すなわち臨床と実験とを媒介しながら存在し発展せしめられていることを知っている。

成果ゆたかな諸科学にたいして、成果の乏しい諸科学たる社会学・心理学・政治学などの人間諸情況 human situations に役立つ技能にかゝるる学問をみてみよう。これら社会学は学生にむかつて、社会問題について際限なく論ずることを奨励しはするが、普通の人間諸情況に役立つ社会的技能を何一つ与えていないように思われる。学生はすぐれた成績を修めて卒業していても、現実的諸情況に関する具体的知識は極めて低く、社会的混沌に秩序をもたらしべき役割を果すだけの素養を身につけていない。彼等には、事実の観察よりも、複雑な論理や無統制的な理論を恣意されてきたのである。なぜ、このようになっているのであらうか。

これら社会学は、成果をおさめた諸科学がつねに単純な技能から出発し、つねに臨床と実験に媒介されながら体系化されているのに対して、技能から離れ、臨床と実験が無視せられているからに他ならない。したがって、社会学の発達のためには、単純な社会的技能の実例が求められ、それが発展させられねばならぬ。それが、学生に与えられなければならない。

ところで、いったい、なぜ社会的技能の発達が低水準にとどめられ、かつまた社会学が有効性を現実においてもたない状態にとどめられたのは、いかなる事情にもとづくのであらうか。何が、それをさまたげてきたのであらう

か。

メーヨーは、社会的技能の発達を低水準にとどめ、社会諸科学の有效性を阻害したものとして、ここ二世紀近くのないだ社会諸科学のなかでもっとも大きな発達をとげかつ影響力をもった経済学を、告発するのである。

彼はいう。経済学は誤まった仮設の上のうちたてられ、理論と実践との間に根深い絶縁がみられる、と。そして、全経済理論の根本的誤謬の起源をデヴィット・リカード (David Ricardo) にもとめ、彼の理論は次の三つの仮定の前に築かれているとして、これを批判する。

- 1、自然的社会は組織されざる個人の群よりなる。
- 2、あらゆる個人は、それぞれ自己保存ないし自利を確保するように計算された方法で行動する。
- 3、あらゆる個人は、この目的達成のため、彼の能力のゆるすかぎり、論理的に考える。

「群としての自然的社会」の思想は、リカードの時代の一般的な思想である。すなわち、(イ)人類社会は、われわれがたとえ変更したいと思っても、変更することのできない自然法によって支配せられている。(ロ)これらの法は決して人類の自由に対立するものではなく、逆に社会の中に生活する人々の間に自然発生的に結ばれる諸関係の表現に他ならないのであって、各人は各自の利害にもとづいて行動するところに調和が樹立せられるのであり、(ハ)したがって政府の干渉は各人および全体の安全性の確保のための最少限であるべきであり、自由放任的であるべきである、というものである。この思想は、彼の時代には、誰からも是認せらるべき、あらゆる根柢があったし、特に反駁すべき理由もなかった。また、現在ならびにあらゆる時代においても、非常事態が生じ社会ないし集団間あるいはその内部で協働関係がこわされ、指導者がそのための手段を講じないときは、社会は一時個人の単なる群に分解し、各人の

自己保存の努力の全体と化する可能性をもっているのである。各人の、自利的動機による行動はこのような解体され、ひき裂かれた社会におけるそれである。そして、個人の思考が能力のかぎり目的達成のために論理的であるということも、危急・危機の場合は、まさにそのとおりであらう。

いまみたように、弧立的個人の集合という仮設 *the rabble hypothesis* は、社会の正常な状態あるいは一般的状态に適合する仮設ではなくして、特殊の状況に適合する仮設なのである。だが、この弧立的個人の集合という仮設は、法律・政治・経済等々の書物に関する思考を支配してきた。最近、このような仮設にとらわれない書物がチェスター・バーナード *Chester I. Barnard* によって、ようやくあらわされた。彼は、人間が弧立的個人の集合としてではなく協働的行為をなして社会を構成していること、すなわち人間の組織的存在としての側面をとらえ、その内部の多種多様の問題をあきらかにし、人間がその問題を処理する技能をあわせもつことを論じているのである。人間は、どのような社会であれ、組織をつくるが、組織がその目的を遂行するうえに、効果的 *effective* であると同時に能率的 *efficient* であらねばならぬ。組織は、その成員のために物質的の必要を充足し、多種多様の社会的機能を果たすために成員間の積極的な協力関係をうちたてねばならぬ。この二つは等しく重要であり、同時に遂行されねばならないのである。原始文化においては、後者が死活をきめるものであったであらうことは容易に想像できることである。

現代の社会は組織的社会であり、産業は組織的生産である。産業組織 *industrial organization* は一方において作業様式 *a way of working* であると同時に、他方において多数の人々のための生活様式 *a way of living* である。作業様式としては技術的に熟達し効果的でなければならず、生活様式としては能率的であり満足のゆく協同体制であらねばならぬ。そして、現代の組織はその作業様式としての側面においては完全に成功しながら、生活の様式として

の側面すなわち協同体制的な側面においては完全に失敗に帰しているのである。人間がこのように協同的、組織的存在であるにもかゝらず、そうではなくて孤立的個人の集合にすぎないととらえ、このような仮設にもとづいた理論が社会科学の諸分野において支配的な地位をしめてきたからである。われわれは、孤立的個人の集合という仮設を捨て、組織という仮設に立って理論を展開し、事物を処理しなければならない。孤立的個人の集合という仮設にたつき、政治的には必然的に強力な力をもったものが孤立的個人を集合させるためのものとして存在せしめられる絶対国家 *the state absolute* を当然の帰結とするのである。民主国家樹立のためには、協同的、組織的仮設にたたざるをえないのである。

これまでの経済理論がその上にたっていた仮設が、不完全、不合理であり、人間の本来的な実状を歪曲するものであることが自覚せられたとき、われわれはあらためて、人間諸情況の探究へとかりたてられるのである。そのとき、われわれはふたたび経済学的抽象・定式化のあやまりをおかしてはならない。まず、現実の事象に関する具体的知識の取得・人間関係的複合体 *the complexity of human relationships* にたいする親密な理解が先行しなければならない。それは、臨床的方法 *the clinical method* ともいふべきものであって、実験室における研究に対する予備行為であり、効果的な手続きによる臨床的研究がなされてはじめて、実験室的研究ならびに論理的抽象・体系化も安全に成功に導びかれうるのである。

メーヨーは、このように論じ、しかも彼自身臨床的研究・接近の具体例として、紡績工場における高い労働移動率の原因の調査研究、ホーンソン実験とくにそのうちの面接実験、東部海岸や都市の金属工業三会社の欠勤および南カリフォルニアの航空機工業の欠勤と労働移動に関する調査・研究の概要と問題点を提示し、人間は個人的利益によつての

み十分な刺戟をうけるような存在ではないこと、人間は人間関係的存在であることをあきらかにするとともに、臨床的方法の何たるかを具体的にしめすのである。

最後に彼は、つぎのようにしめくくる。現在われわれの目の前にあるものは、あらゆる人類の協同的努力がほとんど崩壊してゆく世界であり、真の野蛮の氾濫である。あらゆるグループのリーダーたちは、恐怖・非難・憎悪の言葉を吼えたてることによって、その追隨者と刹那的支持をえてきている。悪魔狩りに多忙になり、「私にとって味方でないものは、私の敵である」といった原始人的心境にある。大学ですら、その例外ではない。この滅亡の都に通じる道を拒否し、今日の国際的・国内的状況に有効に対処する道は、かつてすべての諸科学が歩んできた道以外にはない。技術的技能に関する科学は有効に発達してきている。われわれは、社会的技能に関する科学を、第一段階として直接的知識 *firsthand knowledge* ないし具体的知識 *knowledge of acquaintance* を忍耐強く漸進的に発達させることであり、第二段階としては、これら知識にもとづいて事態を処理する技能を発達せしめることであり、第三段階としては、実験室的研究の発達のために、有効な技能の論理的内容を明確に叙述することである。

われわれは愛国心をもつだけでは充分ではない。何人にたいしても憎悪や怨恨をいだいてはならない。そして、社会的技能を技術的技能と歩調を合わせて発達させなければならない。と、メーヨーは訴えるのである。

二 メーヨーイズムの問題点

——疎外論と科学論——

人間の不幸は、人間が人間でなくなることから起る。人間のあるべき、本来そのようなものとしてある状態と異な

った状態におかれたときにそれは起る。本来あるべき状態から引きさかれ、遠ざけられ、そむかれるときおこる。
alien (a.) alienate (vt.) alienation (n.) という英語は、そのようなものを表現するものでもあらうか。

メーヨーは、人間はもともと、つねに物質的経済的の必要を充足させねばならないと同時に、相互に自発的な協同関係にあらねばならない存在だ、と把握している。そして、現代産業社会においては、第一の物質的経済的の必要は充足されているが、第二の協同関係の樹立は不充分であり、したがって、個人個人は自分自身の殻にとどこもって、不幸な憑かれた個人的偏見の犠牲となり、不幸な個人の数が増大する徴候にある、というのである。人はパンによって生き、パンのみによって生きない。メーヨーの言うように、人間は物質的経済的の必要を充足しなくては生きてゆくことはできないし、また人間はもともと社会的動物であり、物質的経済的の必要を協働によって確保することによって特殊な種たりえた社会的性格を固有のものとする存在である。したがって、もともと社会的な存在たる人間は、その協同的単位の内部において意志疎通を失ない、孤立化・孤独化するとき、かれは健康な状態ではなく、病的な状態である。協同的単位が全体として、意志疎通を弱め、失ない、さらには敵対的状况を強めるとすれば、その協同的単位は健康な状態ではなく、病的なものであり、協同体の成員にとって堪えがたいものとなるであろう。

コミュニケーションの不足・欠除により、協同関係が損われ、うちこわされ、自己を不幸と感じ、自分自身をこよなく愛しながらも、しかも惨めと感ずる人々が、現代まさに増大しつつある。それは、技術的技術の発達による生産過程の変化、それにともなう人間の結合関係・協同関係の変化が必然的にそれに相対応してコミュニケーションの様式を変化させざるをえないにもかかわらず、技術的技術したがってまた協働関係の変化・発達にともなうコミュニケーションの新しいあり方をうちたてることができなかつた。技術的技術に対応して発展さすべき、コミュニケーション

ンの技能たる社会的技能を發展させなかつたところに、その原因がある、とメーヨーはみる。われわれは、メーヨーのこの把握を否定すべき根拠をもたない。むしろ、積極的に賛意を表してよい。したがってまた、彼が人間ないし社会の病氣ないし不幸を救う手段として社会的技能を發達せしむべきであり、それはちょうど医学がそのようにして發達したのと同じように臨床・実験を媒介として人間關係に関する科学を發達させるべきであるとの意見にたいしても、否定ではなく、肯定するものである。

だが、われわれがメーヨーに従うるのはここまでである。彼の主張が以上の範囲にとどまるかぎりはいよとして、その他の問題ないし立場にたいして弾力的な態度、理解的許容的な態度を失ない、あげくに攻撃的な態度に、表面は控え目でありながら、いでるにいたっては、われわれは袂をわかつたざるをえないことになる。

彼は、現代における人間ないし社会の不幸を救済する唯一の手段としての社会的技能がなぜに發達しなかつたかの原因を経済学にもとめてゐる。すなわち、ここ一、二世紀のあいだ社会科学のうち支配的な力をしめてきたのが経済学であり、経済学は文明的な人類活動の有効な実践のために要求せられる社会的技能を供するものであると考へられてきた。だが、経済学は一つには、社会は本来協同的な人間の集団であるにもかかわらず、バラバラの孤立的個人の場合であるという仮設に立つて理論を展開してきており、二つには理論はつねに臨床・実験に媒介され、理論と実践は統一されねばならないにもかゝらず、経済理論と経済実践との間には根深い絶縁が横たわり、それがますます増大する傾向にある。この二つは、まさに、経済学が社会的技能の發達を阻止せしめた所以にほかならない、とするのである。

メーヨーは、このとき、なぜこれまで経済学が、人類社会はたといわれわれが変更したいと欲しても変更できない法

則によって支配され、その法則は人間の自由と対立するものではなく社会の中に生活する人々の間に自然發生的にできてくるものであり、個人個人が各自利己心の赴くままに自由に行動するとき一見敵対的に見える個人的利害のあいだに調和がたもたれるという原理に立ってきたか、について考えようとしなさい、彼はこの原理、すなわち、社会を孤立的個人の集合とみる仮設が、もともと誤まったものである——人間はもともと協同的存在であるから——から、この原理の作用がいまや完全に失敗に帰したにすぎない、とみるのである。

たしかに、孤立的個人の仮設は、現在ストレートに通用する状況にはない。しかし、なぜ、彼の誤りであるとする仮設が、ここ数世紀にわたって経済学者をはじめ諸他の社会科学の学者をとらえ、かつまた、彼が孤立的個人の集合仮設のいわば元凶とみなしているリカードの時代には、彼自身も認めるように、「この仮設を是認するべきあらゆる理由が存していた」のであらうか。もちろん、それは彼の答えるところではない。封建的社会が解体し、共同体が解体し、社会的分業と私有財制度を基礎として利潤追求を目的とした生産の社会たる資本主義的生产社会が展開したからである。それは、各人がおのおの利潤をめざして生産するうちに、おのずから社会全体が必要とする各種の質とそれぞれの量の生産物のおよび再生産がなされる社会である。そして、社会が存続するためには諸生産物の質と量のバランスがとれて生産・再生産されることが絶対不可欠であるが、それを意志的・計画的になさなにかぎり、何か自然法則的な作用が不可欠であり、資本主義社会ではいわゆる価値法則がそのはたらきをするのである。このようにとらえてみるならば、経済学は人間を経済人であるにとらえて理論を展開したとしても、社会を別に孤立的個人の単なる群だと把握していたのではないことが了解せられると同時に、社会を直載に協同体とのみ把握しなかつたことが理解せられるであらう。そして、彼が「孤立的個人の群」なる仮設の呪縛からはじめて脱したと賞揚するバーナードの

書物は、生産の単位・規模が次第に大きくなり大量生産・大規模生産すなわち協同的・組織的生産となったとき、組織の担い手たる一経営者によつてものされたにすぎない。生産の単位が小なるときは、組織に関する書物はいまだ生れなかつただけのことである。彼が、経済学において理論と実践が絶縁状態にあり、その理論が臨床と実験に媒介せられていないといつて非難することは、はたして妥当であらうか。たしかに、理論が臨床と実験によりつねに媒介されれば、理論はつねに現実によつてためされ、妥当性、有効性を確実に確保することができ、理論は事実⁽¹⁾にたいしてどこまでも謙虚であらねばならないということ、理論が事実⁽¹⁾に即すれば即するほど有効性をますということ、理論が事実⁽¹⁾に働らきかける作用の限界をたしかめることができる。だが、社会科学は本質的に歴史科学である。それは本質的に一回生起的であり、実験を容易にしないものである。理論の歴史の上における実験は、軽々になさるべきものではなく、かりになすとすれば、理論はどこどこまでも事実に対して謙虚であり、本来的に理論は事物に即さねばならないものだといふ認識を踏みはずすことを許さないのである。その認識をかき、理論を絶対とする社会科学の実験は、かならずプラスの面と同時にマイナスの面を惹起せざるをえないであらう。ともあれ、社会科学は、容易に実験をゆるさない性質をもつ。にもかかわらず彼は、社会科学といえどもつねに臨床と実験につねに媒介さるべきであり、社会科学がこれまでそのような方向に発展してこなかつたのは、経済学の責任だといふのである。彼のただしさを認めるとともに社会科学の特殊性の何たるかを知らないものといふべきであらう。

彼は経済学を批判する。だが、彼の経済学批判は経済学抹殺である。彼は人間ないし社会における生産・流通・分配に関する学問をことさらに軽視ないし敵視しているかの如くである。彼は社会における生産・流通・分配に関する学問たる経済学は、物質的生産のための自然科学的研究と、人間協同のための人間関係論的研究の推進により不用となる

か、いなむしろ、経済学を憎み、抹殺すべきものと考えているかのようである。なぜなら、彼は、人間ないし社会の不幸は、社会的技能の発達によって美しい人間関係を樹立することによって克服せられるべきものであるにもかかわらず、経済学は社会的技能の発達を阻害する最大の要因であるとし、さらには積極的には階級対立をあきらかにすることによって、美しい人間関係どころか憎悪と怨恨をまきちらす基礎ともして、これを排撃しているかに読みとれるのである。

彼は協同関係・美しい人間関係をうちたてるためには社会的技能の発達だけだと考え、それ以外の方途はすべて否定するという態度にいたのである。そこで、彼は内心「イズム」を嫌悪しながら、同時に彼も偏狭な「イズム」のとりことなってしまう。彼は、美しい人間関係の樹立をとまえ、社会的技能の発達のみを唱えるべきであった。そして、できうべくんば、本来協同関係、美しい人間関係たるべき社会において、何故対立や敵対が生ずるのかの物的要因を社会そのものなかに見出し、それを克服すべき道をも示唆すべきであった。社会に即さず、社会を基礎にして生れた理論たる経済学のなかに、人間対立の根拠を見出すべきではなかった。彼はむしろ、経済学に対してもっと謙虚であるべきであった。彼の経済学批判が同時に経済学にまで高められたものとして展開せらるべきであったのではあるまいか。

(1) 戸坂潤『科学論』三笠書房、参照

三 マルクスの疎外論

メーヨーと同じように、人間ないし社会の不幸をみつめ、これを疎外現象としてとらえ、そしてこの点を基軸とし

て経済学を批判したのは、マルクスであった。だが、マルクスがメーヨーと異なるのは、マルクスの疎外概念したがってまた経済学批判の内容がメーヨーのそれと異なるのは申すまでもないことであるが、ここで特に指摘されるのはメーヨーの経済学批判は単なる経済学にたいする非難にすぎないものであったのたいして、マルクスの経済学批判は、それが諸他の経済学に対する激しい批判・非難・攻撃であると同時に、それが積極的に経済学たるの名と実をそなえたものとして展開された点にあるのである。

マルクスは、人間を本来、次のような存在として把握していた。人間は何よりもまづ自然の一部である。人間は自然の一部であるから、人間以外の自然と不断の関連の過程にあることによって存在しうるのである。つまり、人間が自然に働きかけることによって生きるということは、具体的にはかゝることを意味する。ところで、人間は自然に意識的に働きかけることによって生きている。他の動物が自然にたいして本能的に適應しながら生きているのに、人間は意識的に働きかける、すなわち労働することによって、それも孤立的ではなく協同して労働している一箇の類である。人間は意識的な類的存在であり、労働によって他の動物と区別せられる特殊な動物であり、存在である。

人間存在が本来、以上のようなものであるとすれば、私有財産制度と分業のもとにおける労働は、疎外された労働として存在し、労働が疎外されることによって人間は人間でなくせしめられるのである。賃銀労働者の労働は、資本所有者に売り渡した労働であり、彼にとっては自分自身の労働ではなく、自分自身から外化 *Entäusserung* され引き裂かれた労働であり、自分の労働でありながら他人の労働として自分自身に対立し、敵対するのである。それは、自発的な労働ではなく、強制労働であり、労働そのものが人間の欲求の発現そのものではなく、労働以外の欲求を充足するための手段と墮しているのである。それは、よろこびの行為ではなく、難行苦行となる。

労働が自分自身のものでなくなれば、労働生産物もまた、労働者から引き裂かれ、彼に対立し、敵対した存在となる。だから、労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、彼の労働がその生産力をより増大すればするほど、それだけ彼は貧しくなる。彼が精を出して働けば働くほど、その生産物は大となり、それは彼をあらためて支配する力となって、彼に立ちむかってくるのである。

さて、労働者にとって、彼が働らきかける対象が自分自身に属さず、彼が生産手段を所有せず、それから引き裂かれていくということは、人間が働らきかけるものはどのような形態をとろうとも本来自然なのであるから、彼が労働する手段・労働する対象から引き裂かれているということは、自然から引き裂かれているということである。労働者が自然から引き裂かれているということは、人間は本来自然の一部でありながら、自然の一部たることを拒否されているということである。

更に考えてみれば、人間は労働によってのみ、他の動物と区別される存在であり、労働はいわば人間の象徴のごときものである。したがって、賃銀労働としての労働は、このような人間にとってそれ自体絶対的意味をもつ労働が、労働以外の人間生活の手段と化したことを意味する。すなわち、労働は労働者にとってそれ自体かけがえのない意義をもち、労働以外の生活が労働の手段となるのではなくして、その逆となる。労働手段となり、食い・飲み・眠り・生むためのことが目的となった生活は、動物のそれと同じである。人間が人間でなくなったのである。

マルクスは、以上のように、資本主義社会の人間の不幸をとらえた。すなわち、労働疎外により人間疎外 *Entfremdung* をとらえた。そこから、彼は人間が人間になるために、人間が本来的な人間にたちかえるために、共産主義を唱導するのである。人間を人間でなくする労働における疎外が、その原因とも土台ともなっているのは私有財産

であり、労働における疎外の所産であり、結果であり、必然的帰結たるものは私有財産である。したがって、私有財産の廃絶こそ、疎外の生まれてくる根をたちきり、労働における疎外と私有財産との悪循環をたちきることであり、かくして、人間が本来的な人間にたちかえる唯一の道だとするのである。この私有財産制度の廃絶すなわち共産主義制度の建設を目指す主義が共産主義である。マルクス・エンゲルスの手になる『共産党宣言』のなかにも、「共産主義者は、自分の理論を私的所有の廃止という一語に総括することができる」の句がみえ、私有財産制度の廃止によって、「階級と階級対立とをもった旧ブルジョア社会にかわって、各人の自由な発展がすべての人の自由な発展の条件となるような共同社会があらわれる」と、壮大なヒューマニズムをうたいあげている。そして、そのとき、彼の社会主義が他のそれと区別して自から科学的社会主義と呼ぶように、彼の人間観にもとづく疎外論を基底にした経済学批判、資本主義批判が、資本主義の内的論理、資本主義の生成・発展・消滅の法則を体系的に構築することにより、客観的法則すなわち科学にもとづく社会主義として提唱するところに、この主義の強力な説得力と強固な現実性があたえられるのである。

まさに圧倒されんばかりである。周知のように、これに比肩できる社会思想はない。われわれもまた、彼の疎外論にしたがいたい。ところで、彼の疎外論については、よりたちいって、つぎのように理解してもよいであろうか。

マルクスのいうように、人間は自然の一部であり、動物すなわち生活活動をするものであり、そのうち意識的な生活活動をすることによって、諸他の動物とは区別される類的存在であり、その意識的生活活動のうちとくに諸他の動物と区別されるものは、労働にほかならず、そして人間は労働を協同でしたがってまたその他の生活活動も協同でなす、すなわち社会をなしている、一つの類・一つの存在である。マルクスは、この人間のいわばこれによって人間が人間

たりうるというその労働が私有財産関係・階級関係のもとにおいて疎外せられ、生産物が疎外され、したがって自然から疎外され、人間が人間から疎外されると論じたのである。この論理のかぎりでは、疎外は階級関係、特定の階級関係をとりていえば資本と賃銀労働の関係、資本主義的生産関係が、そのまま疎外の論理として把握されている。そのかぎりでは、この疎外の論理は関係という形式的、概念的、観念的なものである、ということができよう。

疎外の実質的・感覺的・具体的なものというものは、次のようなものであらう。それはさきのマルクスの人間把握によって、そのまま演繹することができる。

人間は意識的生活活動、労働を中心とした生活活動、共同的生活活動をするものである。だから疎外の感覺的、実質的具体的なものは、人間が直接的に労働することから引き裂かれることであり、自分のしたいと思う労働ができずしなくない労働を強制させられることであり、自分の肉体的、精神的能力の限度をこえて労働の量を強制せられることである。また、労働の生産物が自分および家族の精神的、肉体的生活を充足するのに不満足であることである。さらに、諸生活環境たる社会において、その協同関係・社会関係において引きさかれ、孤立化させられることである。これが、感覺的であり、実質的であり、具体的な疎外であり、このような状況すなわち疎外状況におかれたとき、人間は感覺的に、ただちに自己を不幸であり、惨めであるとうけとるのである。わたくしは、この直接的・感覺的な疎外を、まず第一次的に積極的に把握したいと思う。マルクスは、このような疎外をどのようにとらえていたのであらうか。疎外をまず、このようなかたちで、叙述してはいない。むしろ、当然のこととしてとらえていたのであらう。マルクスの人間観、疎外観としては、まず、このような疎外が把握されるべき性質のものであるからである。

このような感覺的・実質的な疎外は、階級関係が存在すればなおさらのこと、階級関係が消滅した社会にも存在す

るものであることは言うまでもない。いかに生産力が発達し社会の成員の一人一人にとって物的欲望が完全に充足されたとしても、「各人の自由な発展がすべての人の自由な発展となるような共同社会」は、そうたやすくは現われえない。各人は、それぞれ異った素質をもって生まれ、異なった環境、体験のもとに自己形成する以上、異なった価値と信条をいだいて生きるであらう。その自由な発現が完全に保証され、各人が能力に応じた地位をえ機能を發揮するような社会の出現は、希求はされるが、容易に樂觀をゆるさないものがある。

逆にまた、階級関係のもとにおいても、全ての人ではないが、一部の人間にとっては彼の好む労働に従事し、労働を何より楽しみ誇りとし、家族を順調に養い、したがって疎外感をいだかないこともすくなくない。

ところで、社会現象は大量現象として観察せられ、把握せられるべき性質のものである。例外的な部分的な事象のみをとりあげて云々することはできない。ともあれ、あきらかにされたことは、所有関係・階級関係にもとづく疎外すなわち形式的・概念的な疎外と、各人の精神的・肉体的欲望を直接的にひきさきこらす感覚的・実質的な疎外との区別の存することである。では、資本主義的所有関係のもとにおける形式的疎外と実質的疎外とはどのような関係にあるであらうか。

形式的疎外は、実質的疎外を引きおこさずにはやまない。形式が何らかの内容をとまわらないことはありえないからである。だが形式的疎外はただちにそれが実質的疎外とはならないことはすでにみたとおりである。形式的疎外が同時に実質的疎外となるためには、それは何か具体的・感性的なものを媒介としなければならない。そして、この感覚的・実質的疎外を引きおこす感性的な契機は、階級関係のもとでなくとも実質的疎外を引きおこす契機となりうるものでもあるのである。

資本主義的な所有関係すなわち形式的疎外は、いかにして実質的疎外に転化するであらうか。まず、所有していない者は、所有している者の下で賃銀労働者として働らかなければならないが、つねに彼は働らくことができるとはかぎらない。すなわち、失業である。失業こそ実質的疎外の最たるものである。それは、労働することもできなければ、労働生産物の一部すらうることでもできず、生命の維持すらできない。次に、賃銀労働者として労働する機会をもったとしても、彼の労働力の買い手であり、その消費者である資本家は、彼は生産の指揮者としてすぐれているから指揮者であり資本家であるのではなく、その逆である。自分より劣った人間の下で労働する場合がすくなくならず生じ、むしろそのような場合の方が多いかもしれぬ。かつまた、利潤追求のための労働強化、労働時間延長は、疎外感をひきおこすであらう。自発的労働ではなく、強制的労働たるの性質をもつ、また、分業による疎外、機械による疎外も、それが資本主義的関係のもとにあるかぎり、分業も機械もいずれもそれは資本の具体的な姿態として存在しているわけであるから、形式的包摂は同時に実質的包摂ともなっているわけである。

労働生産物の面からみても、賃銀が低ければ低いほど、利潤が大になるわけであるから、彼および彼の家族の生活は不十分な消費しか不可能になり、精神および肉体の健全な維持発展を不可能にする場合が多からう。また、生活は安定したとしても、労働しない者の富がますます増大するといった現象をみたとき、疎外感にとらわれざるをえないであらう。また、豊富豪華な商品の前にたつて買うことのできないとき、疎外感を覚えるであらう。

さらに、資本としての商品がたとえば自動車人が人を傷つけ、殺し、薬品や食品がかえって人間の健康をそこなう毒物となり、資本としてのマス・コミが人間の各人の自由な知識の高度化をさまざまに、画一化・白痴化の役割を演ずる。また、資本の現実的姿態としての工場が、その排気によって大気を汚染し、工場汚水が海や河川を死の海・死の川と

化し、人間から自然をうばってしまうのである。

ところで、資本主義的生産関係・形式的疎外は、つねに実質的疎外の一筋道をたどるわけではない。そのなかに、資本主義的生産関係そのものが実質的疎外を克服しようとする論理と現実をもつのである。すなわち、資本主義的生産・利潤追求生産において、生産性の向上という契機が大きな役割を演ずるのである。生産性の向上を実現しようとするとき、実質的疎外は全面的ではないが、部分的に克服されてくるのである。もちろん、形式的疎外が克服されるでもない。

労働の生産力を高めようとすれば、強制労働たることをやめ、自発的労働にしなければならぬ。また、能力の劣った者がただ資本の所有者であるという資格において生産における指揮者・管理者たる地位にすわりつづけるというわけにはいかなくなる。労働時間の延長や強制的な労働強化をやめねばならぬ。労働時間の短縮化傾向や適度な休憩時間の設定や労働環境の美化、快適化がはかられるようになり、さらには労働の自発的意欲が高まるような配慮がなされ、労働者各人の適性にあつた労働が与えられ、各人の労働能力が伸長されるようになり、労働協同体の融和策がはかられるようになる。実質的疎外感や労働生産力を低下させるから、これを克服しようとするのである。

労働生産力の向上は大量生産となり、大量生産は大量販売、大量消費をともしなわなにかぎり、再生産を続行することはできず、したがってまた資本主義的生産関係を再生産することはできない。そこで、労働者の労働生産物の消費量の絶対的増加の可能性が生じてくるのである。

だが、実質的疎外克服の道は、つねにそれと逆の要因たる強制労働的・費用節約的要因との対抗関係のなかで貫かれるのであるから、坦々たるものではなく、資本主義的生産関係そのものが大きな可能性としてもつ戦争によって

も、阻害されざるをえないのである。

以上のマルクス疎外論は、わたくしの理解するそれであることは、申すまでもない。にもかゝらず、ここでわざわざこのようにことわるのは、彼の疎外論が展開されている例の『経済学Ⅱ哲学手稿 Okonomsch-philosophische Manuskrupie (1844)』の叙述に忠実にしたがつてはいないということである。わたくしは、自分流に『経済学Ⅱ哲学手稿』のなかの疎外論をまとめ、さらにマルクスがつかつてはいない形式的疎外と実質的疎外なる概念を設定し、兩者の関連においてとらえているからである。さらに、形式的疎外と実質的疎外の概念は、『直接的生産過程の諸結果』において展開せられる「資本のもとへの労働の形式的包摂」および「資本のもとへの労働の実質的包摂」なる概念と共通している面もあるが、かならずしも同じではない。このような点からして、わたくしの理解するマルクスの疎外論と、わざわざことわるのである。

四 ドラッカーの疎外論

マルクス主義をもつて、「これはヨーロッパでこれまでにのみ出されたものなかでもっとも広壯深遠な教義である」⁽¹⁾としながら、マルクス主義が、人間を本来経済人と把握する人間観の上にうちたてられたものなるが故に、ヨーロッパもまた自分自身もこれにしたがいえない、と主張するのがドラッカーである。そして、彼は現代人の疎外のよつてきたるところを、彼のいわゆる「大量生産の原理」にみたたのである。

彼は次のように論ずる。社会秩序としての資本主義、教義としての資本主義は、経済的進歩があれば人は自由平等

の社会でそれぞれ自由平等になれるという信念の表現である。経済的進歩のための最大の横杆とも考えられるものが私的な利潤動機である。利潤動機に積極的な社会価値をあたえるために、個人の経済活動をあらゆる制限から解放しなければならず、経済的価値は経済外の諸価値の最上位にすえられ、社会のエネルギーは経済目的の推進に集中されねばならない。その彼岸に、自由平等の理想社会がみられる。

だが、この約束は封建社会の諸束縛をうちやぶりはしたが、「機会の均等」という形式的な平等さえも、もたらしはしなかった。職人や農民にとっては、つつましかながらもこれまでもっていた経済上の安定とわかれ、経済上の不安とおそれをいだけせられたのである。プロレタリアとブルジョアとの分裂、経済上の自由により不平等が深刻化し、社会制度としての資本主義・教義としての資本主義はやぶれた。そして、それは大量生産方式の出現によって決定的となった。

彼によれば、マルクス主義も経済人仮設に立った教義であるとする。すなわち、経済的価値を最上位におき、経済的進歩により自由平等の社会の実現をみようというものである。このかぎりでは、資本主義と異なるところはない。異なるのは、資本主義が私利私欲を社会行動の最高指導力の王座にすえておけば、おのずから経済的進歩がもたらされ、その結果として自由平等の社会が出現すると期待したのである。理想社会は私有財産制度をなくし利潤動機をなくすことによって可能であるとするものである。資本主義の崩壊は、マルクス主義によって救済されるべきであった。だが、ヨーロッパの人々はマルクス主義にたいする信頼を失っていた。だからこそ、ファシズムが出現したのである。

マルクス主義のおかげで、富と消費がふえ、あらゆるプロレタリアートに今日の富豪以上の生活が許されるように

なるかもしれない。だが、マルクス主義は信奉されないだろう。なぜならば、マルクス主義の社会的約束が、決して果されないのであらうということがわかったからである。すなわち、「資本主義のような自由も平等もない社会をやめにして、階級のない社会で自由と平等を実現すること」という約束は、マルクス社会主義のもとでは、逆にいっそうきびしい自由のない階級社会になるのが必定だとわかったからである。私有財産制度はなくなる。したがって、所有にもとづく階級はなくなる。だが、産業化、社会化は必然的に資本主義社会に存在していると同様のプロレタリアートとは異った中流階級を生み出さずにはおかない。また、プロレタリアの名において権力を握った政党が、人民大衆にその権力を渡す日は何時くるのであらうか。独裁政体は、ブルジョア階級がなくなるとき、どうしてプロレタリアの専制だということができよう。かくして教義としての力を失った。資本主義の不正を革命によって打ちやぶることを約束して未来の秩序を説く福音の地位からおちて、資本主義の内部の反対勢力になった。反対勢力としては大いに有効であり、かつまた、大量生産革命ないし産業社会になっていない後進諸国においては、いまでも支配的教義たりうる。何にかぎらず少数の大所有者をなくしさえすれば、よいわけであるから。

さて、ドラッカーは何よりも彼のいう西欧の保守主義的思想の伝統にたとうとする。つまり、自由、法と正義、仕事と責任、人間の独自性・尊厳に信頼をおくと同時に、人間が誤ちを犯しやすき存在であり、知識や理解はつねに限られたものである、という認識である。⁽²⁾ その彼は、現代人の不幸をいかにとらえているであらうか。

彼もまたマルクスと同様に、「労働者の生産物および生産手段からの分離」の事実をもって現代社会における決定的原理として把握している。だが、マルクスと異なるのは、マルクスが「労働者の生産物および生産手段からの分離」を私有財産制度よりもたらされるものととらえていたのにたいして、彼は大量生産の原理に縁由するものと把握して

いる点である。

大量生産の原理とは、それは単なる機械化の技術的な原理ではなくして、専門化と統合よりなる人間の協働の原理、すなわち人間組織に関する原理、社会的原理である。多数の人間による組織的生産、大量生産の原理の貫徹は労働者が一人一人それぞれに生産手段を所有することを不可能にし、したがってまた生産物をそれぞれに自分のものとすることを不可能にする。かくして、家庭は生産の場であることをやめ、家族はバラバラとなり、家庭は単なる生物的単位にすぎなくなる。さらに、生産手段と生産物が労働者から分離されると、個々人が生産手段と結びつけられまたそれが拒否されるのは他人の意志にかゝわるものとなり、失業と不況はさげがたいものとなり、組織の巨大化とともに権力の集中は必然的なものとなってくる。

さて、労働者の生産手段と生産物からの分離が、生産方式ないし生産の場における人間の直接的な協同関係、すなわち、組織にもとづくものであるから、それは資本主義とか社会主義というような政治的・法的な上部構造的なもの社会体的なものより、一段と基底的なものである。組織的生産のあるところ、いずれもさげがたいものであり体制の変革とは関係ない。だが、体制の問題、イデオロギーの問題はどうでもよい、というのではない。それはこの組織の提出する問題をいかに解決するかをめぐる決定的なことからである。いかなる価値と信条にもとづいて、この問題を解決するか。必然的に集中化せざるをえない権力、意志決定と統制をいかに処置し、行使するか、をめぐる問題なのである。⁽³⁾ ドラッカーは、一つの価値と信条を強制するのではなく各人に自由な価値と信条が許容され、各人が能力に応じて社会において地位と機能を保証される産業社会を希求するのである。そのときいわゆる分権制を大企業内部は言うに及ばず、意志決定のあらゆる場において妥当する原理として、これを強調するのである。⁽⁴⁾

以上、ドロッカーの経済人仮設にたいする批判および彼の疎外論について、その骨子をまとめてみたが、これにたいし若干の検討を加えてみたい。

ドロッカーは、マルクス主義をもって経済人の仮設に立つものだとしている。はたしてそうであらうか。マルクス主義の哲学的基礎たる唯物論が、通俗的に理解されるように、人間にとってつねに物が一番大事であり、人間行為の価値基準の至高なるものは経済的価値にほかならないとするというのがごときものであるとすれば、マルキシズムは経済人仮設に立つものとすることができるであらう。だが、前節においてみたように、マルクスは、人間をもともと経済人であると把握していたわけではない。彼は人間を動物であり、動物とは生活活動である、ととらえた。その上で、人間が諸他の動物と決定的にことなるところは、「人間は彼の生活活動そのものを、彼の意欲と彼の意識の対象とする。彼の生活は意識的な生活活動である」したがって、「人間はひとつの意識的な類的存在である」⁽⁵⁾と規定している。そして、人間が人間でなくなさしめられることから、本来の人間に立ちかえらさしめるために、人間を人間から、疎外する根源としての私有財産制度を廃棄しようとしたのである。そうすることによって、人間が本来の人間に立ちかえれる、すなわち、意識的な存在として、精神の自由な昂揚と結びついた生活活動を展開することの可能な社会の実現をはかったわけである。あるいは、このように、いってもよいかもしれぬ。もともと、人間の制御のもとにあるべき物・生産物が、一つの対象的世界として自律的な運動をたどり、人間がそれに翻弄せられている状態すなわち、資本主義的経済法則の支配する社会を止揚することにより、物によって支配される人間から、物を支配する人間に復位しようとしたのである。

では、なぜ、このような人間主義的である主義が、人間主義を標榜するドロッカーによって、「共産主義というも

のは邪悪なものである。その発展の原動力となっているものは、ねたみと憎しみという許しがたい罪である。そしてすべての自由および価値を力に屈服させることを目標にしている。その本性は獣性であり、人を動物としてのみ認め、すべての倫理、人間の尊厳、人間としての責任を否定するものである⁽⁶⁾とまで、嫌悪せられるにいたつたのであるうか。これを、ドラッカー思想はブルジョア思想であり、ブルジョアよう護のために、ブルジョアを倒せという思想を攻撃したのである、といってしまうことはなほだ容易である。だが、むしろ、このようなドラッカーに対する反論の仕方が、ドラッカーをして、マルクシズムのヒューマニズムを見失なわしめたのである。

およそ教義ないし思想は、その信奉者に、多かれすくなかれ、次のような情況をおこさしめる。そして、その教義ないし思想が深遠であり、偉大であればあるほど、その信奉者にひきおこすその情況は大きくなる傾向がある。

「一、選ばれたる者の意識、人間性の日常的習慣への蔑視、歴史的に決定されている勝利にたいする確信、そのために地上のあらゆる迫害にたえる抵抗力。二、自己の中心的真理を否定する者は、すべて悪魔の業であり、可及的速かに絶滅しなければならぬという確信。三、教養と学問への疑惑。四、教義、思想を示す書物の万能視と引用癖。五、個人的危険の蔑視と殉教の誇り。六、自己に対する不寛容をもっともはげしく攻撃しながら、自分が権力を獲得すると、反対者にたいする寛容を峻烈に拒否する。終局的真理を確信しているから、それを強制的に賦課するのがむしろ義務と感じられる。唯一の罪は弱気である。異説に対する寛容は行動の混乱をもたらすのみと考えられる。七、中庸の主張者に対するいらだたしい軽蔑感。そこにあるのは『全てか然らずんば無』の意識であり、公然たる敵よりも中途半端の味方を一層容赦しない傾向。八、救済から除かれるかも知れないという恐怖が阿附偽善の徒を生む⁽⁷⁾。」

この反人間主義的な、痛烈な美質的な疎外状況が、マルクス主義が宏壯深遠であればあるほど、マルクス主義の信

奉者によってひきおこされる可能性と現実性をもつ。ドラッカーは、このおよそ、どの教義ないし思想にも附着する可能性をもつものを、マルクス主義者のなかに見出し、それをマルクス主義そのものの本性と見誤まったのである。この情況は、かつて、ピュリタニズムに、強烈に附着したことを想起すべきである。

次に、彼の「労働者の生産手段と生産物からの分離」論にうつろう。彼は、大量生産、組織的生産が、労働者個人が生産手段をそれぞれ所有することを直接的に不可能にし、かつ生産物をそれぞれ所有することを不可能にした所以であるとしている。この論理の存在することを、われわれは卒直に認めなければならない。だが、にもかかわらず、労働者の生産手段と生産物の分離を生ぜしめたものを作業様式のみに帰せしめることはできない。私有財産制度を基礎とする賃労働と資本との関係こそ、労働者の生産手段と生産物からの分離の事実そのものとみなければならぬ。そして、「労働者の生産手段と生産物からの分離」という現象は歴史的にも彼の言う大量生産革命にはるか先行するものであることは既に周知の事実である。大量生産革命は、彼によれば、ヘンリー・フォードが最初に「モデル・T」を製造した時点⁽⁸⁾を出発点としているのである。

彼のいう大量生産の原理は、むしろ「労働者の生産手段と生産物からの分離」をいっそう促進する物的要因をなすものというべきであり、これにより、この原理が本質的に社会的原理といわれるように、企業体の存在をますます社会的存在たらしめ、その所有の私的性格を許容しなくなると認識すべきである。それは、いわゆる「所有と経営の分離」論によって、たやすく解決されるといった性質のものではあるまい。彼の大量生産革命論については、わたくしは、すでに検討したところ⁽⁹⁾であるので、ここでは、これ以上論じない。

ドラッカーは、マルクス主義者に附着したマルクスズムにとって非本質的なものにふれて、すなわち、いわば思想に

よってひきおこされる疎外に直面して、マルクシズムにおいて非本質的なものをもっての本質的なものと誤認し、マルクスの明らかにした真理について眼を覆っているといつてよいかもしれぬ。それでは、ドラッカーの積極的意義はどこにあるか。それは大量生産社会⇨産業社会にあつては資本主義であらうと社会主義であらうと存在するであらう諸問題を追求した点にあるのである。

(1) P. F. Drucker, *The End of Economic man — A Study of the New Totalitarianism —* 1939, 岩根忠『経済人の終わり』東洋経済社報社、四九頁

(2) P. F. Drucker, *The Landmarks of Tomorrow* 1957, 現代経営研究会訳『変貌する産業社会』ダイヤモンド社、序論より、

(3) 「労働者の生産手段と生産物からの分離」論ならし産業社会論は、P. F. Drucker, *The Future of Industrial Man* 1942 田代義範訳『産業人の未来』未来社 および *The New Society — The Anatomy of the Industrial Order* 1950, 現代経営研究会訳『新しい社会と新しい経営』ダイヤモンド社による。

(4) 分権制論は、P. F. Drucker, *Concept of the Corporation* 1946 (下川浩一『現代大企業論』未来社刊 予定)に展開されてゐる。

(5) Oknemisch-philosophische Manuskripte, Marx / Engels Gesamt-ausgabe Band 3. p. 88

(6) P. F. Drucker, *The Landmarks*, p. 249 『邦訳書』二九〇頁

(7) 丸山真男教授の *Harold J. Laski, Reflexions on the revolution of our time*, 1943. の紹介批評論文「ラスキーのロシア革命観とその推移」丸山真男『現代政治の行の思想と行動』未来社所収のなかで、ラスキーによるピューリタンとボルシェヴィキの構造の共通性を教授によつてまとめられたものからボルシェヴィキおよびピューリタンに直接かかわる表現を除き去して、教義ないし思想の信奉者一般の構造に普遍化して利用させていただいた。

(8) フォードのモデル・Tは、第一号が製造せられたのは、一九〇八年十月一日である。

(9) 拙稿「ドラッカー経営思想の研究」立教経済学研究第十八巻・第四号・および拙稿「現代大企業の意義と機能——ドラッカー経営思想批判——」立教経済学研究第十九巻・第四号・新版

五 むすびにかえて

以上、メーヨーの思想の骨子を紹介し、その問題点として、これを疎外論において把握し、その疎外論の正しさないしはその限界、別言すれば彼の理論の有効性の射程範囲をたしかめるために、マルクスの疎外論およびドラッカーの疎外論をみてきた。ここにおいて、「むすび」として、マルクスの疎外論、ドラッカーの疎外論との関連において、メーヨーの疎外論をいっそう立ち入って論究しなければならぬところである。だが、小論においては、とりあえず問題提起にとどめたい。

ただ、つぎの点だけは、指摘しておきたい。それはメーヨーもまた、ドラッカーがマルクシズムの理解においてつまずいた所で、同じようにつまずいた、ということである。We must no hatred on bitterness toward anyone. 「われわれは何人になりたいしても憎悪や怨恨をいだいてはならない」という言葉をもって、主著 *The Social Problems* を結んだ彼が社会主義者・共産主義者にたいする観察だけは、まことに偏狭である。彼はいう。「(1)これらの人々¹は仲間の者を除いては、友人をもっていなかった。(2)彼等は会話の能力をもっていなかった。社会の変革とその破壊をむしかえすだけである。(3)どんな小さなことでも万事が危機として取扱われ、大変な気持ちをもって迎えられた。(4)彼等は世間を戦いの場所として考えた」と。彼の著書で、ここらに関する箇所は、異常なまでに、多くの行数を費し愛情をかいでいる。

この彼の社会主義者・共産主義者観は、一面においてただしく、本質的に正しくない。なぜなら、彼はそのとおりに感じ、激しい嫌悪をもよおしたからであり、このようなものが、彼の疎外論の克服さるべきものであり、あるいは彼の思想の敵とうけとられたからであらう。だが、マルクスの疎外論をみ、ドラッカーの疎外論のつまづきをみてきたわれわれにとっては、メーヨーは、真の社会主義者、共産主義者をみていない、彼がみたものは社会主義者・共産主義者にとって本質的なものではなくして、すべての教義ないし思想の信奉者につきまとう可能性のつよい一つの思考様式ないし態度である。その教義が偉大であり、その信奉の度合がつよければ、この附着的思考様式ないし態度は、それだけ強烈となる。メーヨーが、社会主義者・共産主義者そのものとして観察したのは、この附着物にすぎず社会主義ないし共産主義がその思想として不可欠の部分として持っているものではない。この附着物をもって、本属的なものと見誤ったのである。そして、メーヨー自身もまた、彼の思想を絶対視する病にいささかおかされているといふべきである。

われわれは、メーヨーあるいはドラッカーの誤りやつまづきを指摘しなければならぬのは言うまでもないが、それ以上に注意せられなければならないものは、偉大な教義ないし思想の熱烈な信奉に附着する一つの精神状況である。このようなものの附着なしに、教義ないし思想は、歴史の現実において、力とはならないものであらうか。

(一) E. Mayo, *The Social Problems*, Chapter I—V, p. 26—27. 「邦訳」三四—三六頁。